

▶ 部下育成にもっと自信がつく12カ月

部下に発破をかけるとき 部下の当たり前が、上司の既成概念を打ち破る

人は多くの経験を重ねることによって、さまざまな仕事に対応する力を培っていく。一方で、経験を重ねることで固定観念が形成され、判断を鈍らせてしまうこともある。部下育成は、そんな自身の思い込みを排除するチャンスでもあるのだ。



松下 直子
株式会社オフィスあん
代表取締役

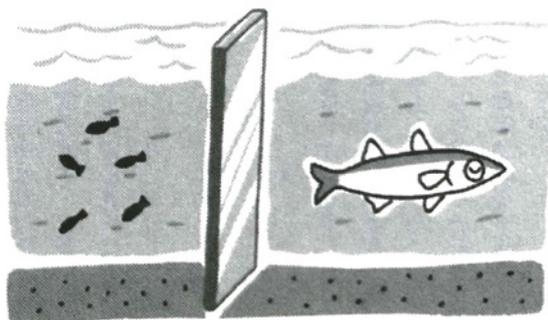
カマスの実験が伝えるもの

若手社員と話をしている、こんな話を聞きました。

「期待しているよ、若いんだからどんどん挑戦しろよ」とよく言っていたのですが、そもそも通常の仕事もちゃんとできていない、わかっていないのに、その上に挑戦しろと言われても、どうしていいのかわかりません。何をすれば挑戦できるのでしょうか」

発破をかける上司の気持ちもわかりますが、こういう些細なすれ違いが、ほころびのきっかけになり得るのかもしれない。

こんな実験があります。和歌山県白浜町にある近畿大学の水産試験場で行われた「カマスの実験」です。



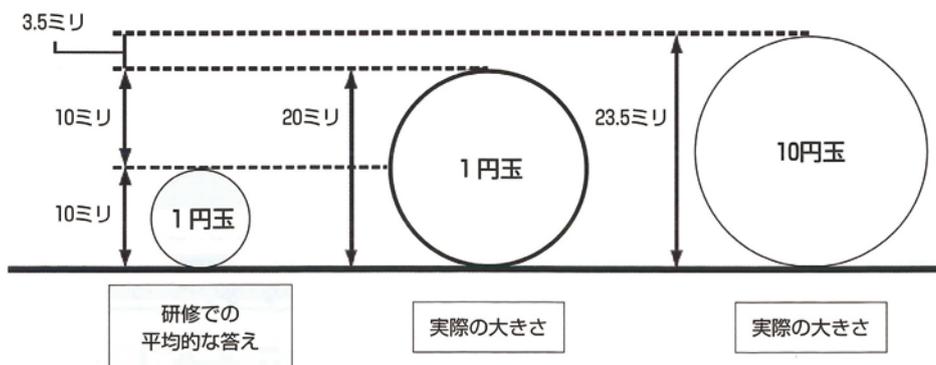
養殖場を透明なガラス板で2つに区切り、片方にカマスを放し、もう片方には毎日決まった時間にエサの小魚を入れます。カマスはエサが来たのを見て突進していきませんが、当然ながらガラス板にぶつかってしまう。これを何度も繰り返していくうちに、カマスは「エサのある方に向かっていくと痛い目にあう」ということを学習します。すると、ガラス板を外してもエサに向かっていかなくなるんだそうです。さらに、そこへ学習をしていないカマスを入れると、そのカマスはエサをめがけて躊躇なく向かって行ってムシャムシャ食べる。学習したカマスたちも、それを見て、「なんだ、ちゃんと食べられるじゃないか」ということがわかって、またエサに向かっていくようになる。そんな実験結果を得ました。

年を重ねただけで人は老いない。
理想を失う時に初めて老いがくる。

(サムエル・ウルマン)



【参考】 1円玉の直径は何ミリ？



若者にとっての当たり前が、 経験者にとっての挑戦

人間もさまざまな経験を重ねるにしたがって既成概念に捉われるようになり、それを判断基準にしてしまうものです。そんな上司が、若手社員にとってのガラス板の役割を果たすようになるのです。突進しようとする若手社員を、上司が「そんなことをうちの会社でやったらいけない」と押しとどめているうちに、言われたことだけをやっていけばいいという考え方になっていく。だから、上司は染みついた既成概念を捨てなければならないということです。

学習をしていないカマスは、まさに若手社員。

「だから上司が言う、挑戦しろ、というのは、ここで臆せず餌を食べに行けばいいということ。あなたらしく行動することが、きっと私たちからすると挑戦になり得るのではないですか」

などと話してやると、若手社員はほっとした顔をしてくれます。ぜひ、部下の方に、このカマスの実験の話をしてあげてください。



部下育成を通じて、 自身の思い込みを排除しよう

ここでクイズです。1円玉の直径は何ミリあると思いますか。いろんな会社の研修でこのクイズを出しているんですが、皆さんの答えの平均はだいたい10ミリくらいです。

さて、正解はなんと20ミリです。ちなみに10円玉は23.5ミリで、1円玉と3.5ミリしか違いません。「1円玉は小さくて、10円玉はそれよりずっと大きい」という思い込みが多くの方にあるようです。

このことひとつとっても、私たちの思い込みがいかにか日常にあふれているかがおわかりいただけることでしょう。若い人の方が固定観念に縛られず正しい意見を言ってくれるかもしれません。だからこそ、上司は部下に聞くことが大切です。

上司の生きた時代背景とは違う幼少期を過ごしてきた若手世代の経験は、それだけで私たちには斬新なものです。

どうかな、リーダーが優秀なら組織も悪くない。
（「踊る大捜査線 THE MOVIE 2」青島俊作のセリフより）